

# 町民文芸



## 只見短歌会

令和二年六月詠草

大塚栄一

指導

馬場 八智

懸命に守りこし田畑時うつり継ぐ者もなく我も老いゆく

渡部ゆき子

夫逝きし軒の南天に菓作りし小さき鳥の命生まるる

関谷登美子

求めたる青果のシール生産地氏名にエールを送り味はふ

目黒 富子

花々の違ひはあれどそれぞれに趣ありて飽きることなし

新国由紀子

カタツムリ集めて指差す幼孫飛びとびの数声上げて言ふ

渡部ヨリ子

収まらぬコロナウイルス今もなおテレワーク続く娘等にメールす

新国 洋子

亡き姉の名前の入りし小袋にわが名を書きて施設に通ふ

(出詠順)

## 只見俳句会

七月定例会

目黒十一

指導

修 一

礼

暑き日や嬰は三度の衣装替え

喉越しや理由をつけて飲むビール

紺碧の空よ浅草岳の残雪よ  
浮苗挿すほぼ片手間の小百姓

幸 生

一 穂

往還の土の記憶の裸足かな

草引けば手に慕い寄る青蛙

笹の葉の陰干し匂う天井裏  
スポーツも自粛くゝのコロナ渦

信

夏雲や球児の涙二〇二〇年

梅雨空を見上げて今日の農作業

都

植え終る母が好みし千日紅

味そ汁のおわん一杯朝曇り

味代子

傘さして店先ふさぐ牡丹かな

仙台平折目正しく清らかな

